

# 「これだ」という直観を信じてみる

植物の研究から、言語と政治へ、そして、法学から統計・データサイエンスを使う政治学へ、最初から一本の進路を描いていたわけではない。「これだ」と感じたものに飛び込みながら、振り返れば、さまざまな経験が一本の軸につながっていた。イェール大学で政治学を研究する萬屋さんに、文理を越えてきた研究の歩みと、「直観」を信じることについて聞いた。



本校 6 回生

よろずや あんな

**萬屋 杏菜**

Yale University

Political Science 博士課程在学中

比較政治学・政治経済学・計量政治学

**Yale University とは？** 1701 年創立、米国で 300 年以上の歴史をもつ世界屈指の名門私立大学。卒業生・研究者からは、米国大統領をはじめ、ノーベル賞・ピューリッツァー賞受賞者など、各界を牽引する人物を数多く輩出してきた。人文・社会科学から自然科学まで幅広い分野で世界的な教育・研究を展開し、政治学でも長い研究の伝統をもつ。

## 01 | 現在地

### 歴史のデータから、「多様性と政治」を考える

——今は、どんな研究をしているのですか。

**萬屋さん** 今は Political Science の博士課程で、比較政治学、政治経済学、計量政治学を専門にしています。いろいろな国や地域の政治を比較し、政治と経済の関係性も含めて考えながら、統計やデータを使って政治を研究する分野です。私は、歴史資料を集めてデータセットを作り、データサイエンスや統計学に近い方法で分析しています。

——具体的には、どんな問いを扱っているのですか。

**萬屋さん** ISS の頃からずっと、「言語や民族などの多様性がある社会で、政治をうまくするにはどうすればよいか」に関心があります。最近では 1905 年のロシア帝国や、第一次世界大戦後の東欧の国境地域などを扱い、多様な民族が暮らす地域では政治や公共財にどんな違いが生まれるのか、統計的に確かめています。

——研究で難しいのは、分析そのものですか。

**萬屋さん** 発見自体は日々あります。難しいのは、その発見の「何が面白いのか」を組み立てることです。ある国境地域で見つけたことを、「ここではそうだけど、他の地域ではどうなんだろう」「どこまで一般化できるのか」と考える。そこが比較政治学の面白さでもあり、難しさでもあります。

**“ここではそうだけど、他の地域ではどうなんだろう。”**

**他の地域にも一般化できるのか。”**

## 03 | 本校在学時の研究

### 葉っぱから、少数言語へ

——本校では、どんな研究をしていたのですか。

**萬屋さん** 中 1 の頃から、葉脈を使って植物を分類したり、葉をどう処理すると標本にしやすいかを調べたりしていました。中 1 から学会にも連れて行ってもらい、大学の講座にも参加しました。中 3 の時には東大でプラナリアを解剖する講座にも参加して、実際に大学の研究室に行って教授に研究の話を聞くことができました。「研究って楽しい」と思った原点は、あの頃の葉っぱの研究だったと思います。

——後期課程では、研究対象が大きく変わりました。

**萬屋さん** SGH では、本を大量に読んで、情報を整理し、比較して論文にする経験をしました。5 年生ではスイス、ハイチ、アラビア語圏、ギリシャなどを比較し、6 年生ではフランス・スイス・日本を比べて、言語政策や、言語的マイノリティにどのような法的措置が取られているかを研究しました。テーマは変わっても、「知らないことを調べ、整理し、比べる」力は今の研究にそのままつながっています。

——うまくいかなかった研究もありましたか。

**萬屋さん** あります。植物研究では体系的な背景知識が足りず、途中で自分が何をしているのか分からなくなって挫折しました。SGH では逆に大風呂敷を広げすぎて、高校生の限られた時間で知らない国を全部勉強しようとして中途半端になった。でも、そこで研究の厳しさも知りました。

**“「研究って楽しい」と思ったのは、中学生の時の葉っぱの研究のおかげかな。”**

## 02 | ここまでの道のり

### 植物を見ていたら、人と社会が気になった

——本校にいた頃から、政治に興味があったのですか。

**萬屋さん** 前期課程の頃は植物が大好きで、ずっと植物の研究をしていました。でも環境問題を考える中で、「植物だけを見ていても、環境問題や社会問題は解決しない。人や社会を見ないと」と思ったんです。そこから経済や政治、法へと関心が広がっていきました。

——スイス留学も大きなきっかけだった？

**萬屋さん** はい。スイスにはドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語があって、「こんなにいろいろな言語がある中で、どうやって政治が動いているんだろう」と興味を持ちました。少数言語の人たちに話を聞く中で、多様性のある社会では法律や政治が重要だと気づき、後期課程では言語的マイノリティの権利を研究するようになりました。

**民主主義を進めようとして、「これって民主的？」**

——生徒会の経験も政治への関心につながったそうですね。

**萬屋さん** 生徒会長の時、「もっと民主的なプロセスを」と改革を進めていたのですが、だんだん自分が「これが民主的なんだ」とみんなに押しつけているように感じました。「民主主義と言っているのに、やっていることは非民主主義なんじゃないか」と、答えが出なかったことが逆に面白くて、法と政治を学びたいと思いました。

**“民主主義と言っているのに、やっていることは非民主主義なんじゃないか。”**

## SIDE STORY | 「研究」は、葉っぱから始まった

現在の比較政治学とは一見まったく違う、中学生の頃の植物研究。しかし萬屋さんにとって、そこで知った「研究する楽しさ」、観察し、問いを立て、確かめる経験は消えていない。文転した後も理科研究室に通い続け、現在は統計やデータサイエンスを使って政治を研究する。遠回りに見える経験が、あとになって思いがけない形でつながっている。

### 04 | 「これだ」という直観

#### 出願半年前、計量政治学に飛び込む

——大学に入ってから、大きく進路が変わったきっかけは。

萬屋さん 大学4年生の時、たまたまハーバードから東大に来ていた先生の授業を受けました。データサイエンスや統計を使って政治を研究する計量政治学の授業で、「アメリカではこんな面白そうなことができるんだ」と思って、「これはアメリカに行きたいぞ」と急に決めました。出願の半年くらい前です。

——そこから、すぐに動いたのですか。

萬屋さん その先生に「何かやらせてください」とお願いして、研究チームに入れてもらいました。私は結構、直観で動くタイプなんです（笑）。授業を聞いて「これはいいぞ」と思った時に、「よし！」と思って飛び込んだ感じですね。

“「これはいいぞ」と思った時に、「よし！」と思って飛び込んだ。”

——でも、直観だけではチャンスをつかめない？

萬屋さん そうですね。高校生や大学生の時は、まだ世界の全部を知っているわけではないので、自分に何が合うかはなかなか分かりません。だからアンテナを広げていろいろ見ておいて、「これ面白い」と思った時にやってみる。同時に、チャンスが来た時につかめるように、研究や勉強、英語などを少しずつ積み重ねておくことも大事だと思います。

#### Yaleで、比較政治を深める

——実際にYaleへ進んでみて、どうですか。

萬屋さん 比較政治学がすごく強くて、自分がやりたいことに近い研究をしている人が多いので、本当に恵まれています。それに経済学や歴史学も強いので、政治学だけで完結せず、歴史の先生や経済の先生にも話を聞きに行ける。いろいろな分野を組み合わせることで学問ができる自由度は、自分の研究にはすごく合っています。

### 05 | 研究のスタイル

#### 文理をまたぎ、現場へ行く

——本校で、理系と文系の両方の研究を経験したことは、今の研究にどうつながっていますか。

萬屋さん すごくつながっています。前期課程では植物、後期課程では社会科学と、両方の研究を経験しました。今の分野は文理融合で、統計では数学を使う

し、データサイエンスではずっとコードを書きます。一方で、問いは政治や社会についてです。文転した後も理科研究室にはよく入り浸っていて、理系のことをやるのもやっぱり好きでした。だから計量政治学に出会った時、「これは文理融合で、自分に合っている」と思ったんです。

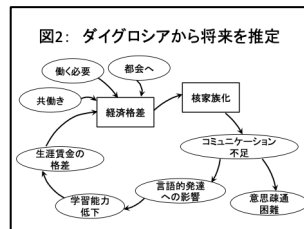
#### 気になったら、実際に行ってみる

——比較政治学の研究では、実際に現地へ行くこともあるのですか。

萬屋さん あります。今書いている論文も、ポーランドの少数民族地域へ行って、そこで人に話を聞き、「面白い」と思ったことがきっかけです。イェールに来てからは、大学のプログラムを使って2か月ほど現地にホームステイし、ポーランド語も学びました。ちゃんと少数民族の人に話を聞く、その地域に行ってみる。そういう現場主義は自分の中にあります。振り返ると、「気になったらやってみよう」という感覚は、ISSで研究していた頃から続いているのかもしれませんが。

——研究を進める時、人に相談することも多かったですか。

萬屋さん 多かったです。ISSでSSHの研究をしていた時は、理科研究室の先生たちに「これはどうするんですか」とずっと質問して、話しながら進めていました。社会科学の研究でも、「言語政策をやりたい」と話したら、別の先生につないでもらい、研究のきっかけになる論文をもらったこともあります。いろいろな人と話して、考えながら研究できたのはよかったと思います。



本校在学時の研究論文より

### 06 | うまくいかない時に／次の世代へ

#### 粘る時と、「さようなら」する時

——分析がうまくいかない時は、どうしていますか。

萬屋さん 「うまくいかない」には二種類あると思っています。意味はあるけれど方法が違っていた場合は、トライ・アンド・エラーで何度も試す。そこは諦めずに頑張ります。でも、本当に意味がなかった場合は、もがいても仕方がないのでスパッと見切る。昨日うまくいかなかった分析はそっちだったので、「さようなら」という感じでした（笑）。

——在校生に伝えたいことは。

萬屋さん 直観的に「やりたい」と思ったものをやってみるのがいいと思います。自分は絶対これをやると決めるのもいいけれど、それで見えなくなるものもある。アンテナを広げて、「あ、これ面白い」と思ったら挑戦してみる。一発目で決めなくてもいいし、嫌だったら変えればいい。

——興味が多いと、「自分には軸がない」と不安になりませんか。

萬屋さん 結論から言うと、振り返ると一本の軸にまとまるんですよ。私も植物、環境問題、言語、法、政治、統計と、脈絡のないことをたくさんやってきました。でも10年くらいたって振り返ると、全部まとまっているような気がする。そんなに思い詰めず、心の赴くままにやっていいと思います。

“振り返ると一本の軸にまとまる。だから、一発目で決まなくてもいい。”

「順調そう」に見えても、失敗はたくさんあった

——こういう切り替え方は、これまでの経験から身についたのでしょうか。

萬屋さん 順調そうに見えると言われることもあります。大学受験で勉強がうまくいかなかったことも、SSHの研究で挫折したことも、留学で言葉が分からず大変だったこともあります。そういう経験を重ねると、研究以外でもうまくいかない時に「まあ、どうにかなるだろう」と思えるようになる。スイスから帰った直後は、「あれほど大変なことはないだろう」という無敵な感じでしばらく生きていました（笑）。

### 現在 → 次へ | 不確定だからこそ、いろいろな可能性がある

まずは博士課程を終え、博士号を取ることが目標。その先は、研究を続けて大学教員になるかもしれないし、別のチャンスが巡ってきてまったく違うことをしているかもしれないという。「どこにいるのか分からないのは不安でもあるけれど、いろいろな可能性がある時期は楽しい」。進路を最初から一本に固定しない姿勢は、これまでの歩みとも重なっている。

### 取材を終えて

今回のインタビューには、在校時に萬屋さんに英語を教えていた教員と、DP6年生10名が参加しました。話を聞く中で、何度か印象に残ったのが「直観」という言葉でした。萬屋さんは、将来を最初から一本に決めていたわけではありません。植物、環境問題、言語、法律、政治、統計と、その時々で「面白い」「これだ」と思ったものに向かってきました。「やってみないと分からない」という感覚で流れに乗りながらも、その背景には、常に視野を広げ、学び、準備してきた積み重ねがあります。だからこそ、チャンスが現れた時に動くことができる。その姿がとても印象的でした。一見すると直接つながらない経験も、後から振り返ると基礎の部分でつながっています。前期課程でのSSHの研究、スイス留学、SGHでの比較研究、生徒会での経験、理系で培った数学。それらをどれも無駄にせず、現在の研究へとつなげているところに、萬屋さんの「芯」が見えるように感じました。今回、改めて印象に残ったのが、萬屋さんが本校在学中、分からないことがあれば理科研究室の先生たちに聞き、社会科学の研究でも先生から別の先生へつないでもらっていたという話です。教員との距離の近さは、在校生にとっては当たり前を感じることもありません。でも、それは決して当たり前ではなく、ISSの大切な良さの一つなのだと感じました。

「直観」を信じる。でも、その直観に従って動けるように、日々少しずつ自分の世界を広げておく。そんな萬屋さんの生き方に、参加した私たちも背中を押されたインタビューでした。

